





Ich bin ein Deutscher Dichter,
Bekannt im Deutschen Land;
Nennt man die besten Namen,
So wird auch der meine genannt.
H. HEIEN

特22
460



最もハイチを好むものなり。その一
殊にその晩年の境遇の如きは、殆
の念に堪へざらしむ。ハイチの詩こ
るべし。

も流麗は伯仲の間にあり。シルレルの雄渾に及ばずとい
へども、しかも奔放自在の妙は却てこれに過ぐ。而して

明治
— 1 —
38 2 22
内交

冷罵百出諧謔縦横の怪腕に至ては、獨逸文學史を通じて、全くその比を見ざるところなり。若し夫れ冷罵のうちに涙あり、諧謔のうちに教あるが如きは、更にその詩をして古今獨歩ならしむる所以なり。

譯者尾上柴舟君は余が友なり。夙に國文國歌に精通し、その流麗なる筆致は同人の敬慕措かざるところ。今やその椽大の筆を揮て、ハイネの詩の尤なるもの幾十編を譯述し、以て世に問はむとす。その苦心慘憺の功勞は、讀

例言

「ゲエテ」に次げる念情詩人と稱せられたる「ハインリッヒ、ハイネ」の詩五十篇、摘譯して「ハイネの詩」といふ。彼れの詩、實に、數百篇に踰ゆ。而して、僅かに、其五十篇を取れるもの、彼れの面目、明らかに、此間に認め得べし、と信ずればなり。

五十篇、皆、*Früherer Lieder* 及び *Neue Gedichte* より取る。而して、其配列の順序は、すべて、其作の順序に従へり。即ち *Lyrisches Intermezzo* (1822-1823) 中のものと先とし、*Verschiedene* (1832-1839) 中の者を後とす。但し、*Junge Leiden* (1817-1821) 中の *Lieder* は、些か故ありし、*Die Heimkehr* (1823-1824) の後に置けり。

原詩、もと、一々題號なし。故に、これに宛つるに、其詩の第一行を以てしたり。われもまた、假りに、譯歌の初句を以て、題號となし、以て、その綴に倣へり。

編中の或者は、嘗て、讀賣新聞紙上に掲載したることあり。今、又、訂正して、爰に載す。

卷末の評傳は、わがハイチに關する零碎の智識を集めたるもの。其年月の如き、諸書、其傳を異にせる處あり。今は、其普通と信するものによれり。譯歌の瓦礫、原詩の金玉を傷くこと、尤も甚し。譯し了て、深く、わが不才を愧づ。

明治三十四年十月

柴 舟 生 識

者のまさに看取すべきところならむ。

現時吾が文壇の大なる缺陷を求むれば、外國文學翻譯の不振、實にその一に屬す。さればこの書の如きは當に獨逸詩歌集の翻譯の嚆矢を以て誇るに足るべきのみならず、又實に吾が文壇の不振を警醒鼓舞して除あるものと謂ふべし。

ハイチがその詩集に序せる言葉の終りに曰く、太陽はかくも美はしく輝けども、終にはまた没するを見ずやと、

されど太陽はまた再び現はるゝなり。五十年前に敗殘落
魄の身を以て沈痛悲壯の歌を詠せし彼は、五十年後の今
日、大東の日出國に於て幾多の渴仰者を有せむことは、
彼の思ひしところなりしや、あらざや。

明治三十四年仲秋

登張竹風齋

第五版のはしがき

野の花の、匂ひなく、色なきも、あやまつては、處女の唇にふる
ることあり。わが、ハインネの詩の、詩をたのしむ若人の手にと
られしも、げにこのたぐひならむ。

今、五だひの摺巻をわかつべくなりぬ、と云へば、いさゝかの
歌を加へ、いさゝかのあやまりを訂しぬ。されど、

今さらに色あるらむべしや香あるらむべしや

たゞ野の花はどはに野の花

明治三十六年九月、秋草の花、匂ひこぼるゝ

窓のもとにて、

柴舟生

ハイネの詩目次

(Buch der Lieder (ナリ))

おのが涙	一
おのが心	二
はてなき恋	三
歌のつばさ	五
てる日の影	七
菩提樹の花	九
小さな眼	〇
荒れわたりたる	一
かゞやきわたる	二
照る日かゞやく	三
汝が睡しき	四
その光ある	五
暗のわが世に	七
おのが心	九
涙おさうて	三三

霞み上りたる	三三
灰色なせる	三四
あらしは鳴りつ	三五
君が門邊	三七
海原さほく	三九
波路の末	三一
深きおもひ	三三
年ののきき	三四
清くうつしく	三六
そのくれなる	三七
もの恐るしき	三八
夜は来ぬ	四〇
死は冷やけき	四二
わが戀入さ	四三
とく起きいで	四四
思ひ懐みて	四五
父の御座	四七
(Neue Gedichte (ナリ))	四七

たのしき五月	五〇
千度八千たび	五一
春の夜風	五三
あきらけき眼	五四
みどり色濃き	五六
さか穂さおこる	五七
心にながく	五八
月影うけて	五九
さく萩かげに	六一
黄金の光	六三
今年の春	六五
静けき磯	六六
影ほのぐろく	六八
我をば君が	七一
黒みわたれる	七二
君がなしたる	七三
颯はなきて	七四
わたのな中に	七五

増補

痛み苦み	七六
楡に秋の	七八
盤のこまや	八〇
橙の色	八二
かさなる雲	八四
樞の大樹に	八六
かゞやきそむる	八八

ハイネの詩目次終



イネの詩

尾上柴舟

おのが涙のしたゝらば

麗しき花咲きぬべし

おのがなげきの響きなば

鶯の音となりぬべし

われを思はゞをとめ子よ
花をば君にまゐらせむ
きみが窓邊にうるはしき
鶯の音もひゞくべし

○

おのが心

おのが心をさき匂ふ
小百合の花に浸してむ
戀しとおもふかの君の

うたをば花は歌ふべし

その歌をよはかの君の
接吻の如くにふるふべし
たのしみ極みあざりし
そのをり君が興へたる

○

はてなき空

はてなき空に幾千年
動かぬ星のかげまげし

愛のおもひをあらはして
かたみに眺めかはしつゝ

彼等はいひぬ美しき
こゝろ富みたる言の葉を
されども教しある人も
解きぞかねつるそのこゝろ

われは學びぬそのことば
われは忘れずそのこゝろ
曉さる志るべとなりにしは

こひしき君のそのおもわ

○

歌の翼

歌の翼にうち乗せて
君をばわれは運びてむ
ガングスの野にほど近く
美しき地をわれは知る

静けき月のかげうけて
くれなるにほふ花の園

その賊あるはらからを
待つは澤邊の花はちす

童は笑みつかたらひつ

見るよみ空の星のかけ

ゆかしき戀のものがたり

うちさゝやくは花薔薇

やさしく賢こき羚羊は

あるはをどりつ窺ひつ

ゆく手遙かにきこゆるは

きよき流の波のおと

棕櫚の樹かけに君とわれ

こゝろ静かにやすらひて

愛と休みをいさうけむ

たのしき夢をいさ見てむ

○

てる日の影

てる日の影に堪へかねて
惱みがほなる花はちす

そのかしらをばうち低れて
待つなり夜を夢みつゝ

月こそ花の戀人よ
やさしき彼れが光もて
夢より花をよびさまし
照らしいでたりそのおもわ

花は開きぬあからみぬ
しづかに空を仰ぎ見ぬ
愛のおもひの痛みより

かをりぬ泣きぬをのゝぎぬ

○

菩提樹の花

菩提樹の花香ににほひ
うぐひす啼きて麗はしく
日影さす日にわれを君
接吻^{キス}しつ抱きつその胸に

木の葉ちりかひ鳥なき
日かげさびしくてらす時

わかれを告げぬ冷やかに
されど姿はいややかに

○

小さき眼

小さき眼まなこの青すみれ
小さきおもわの紅薔薇べにばら
小さきやは手の小百合花
にほひは今もかはらねど
君がこゝろは羨みにき

荒れわたりたる

荒れわたりたる北國きたくにの
岡邊おかべに立てる一つ松
雪と氷の白衣しろぎに
つゝまれながらうち眠る

思ふもとほき東ひがしの
てる日燃えたつ崖かさのうへ
しのびねになく一本の
棕櫚せうりこそ見ゆれその夢に

○
かゞやきわたる

かゞやきわたる日の影に
むかしはぬ花ぞなかりける
かゞやきわたる海原に
注がぬ河ぞなかりける
かゞやきわたるわが君に
ひとかぬ歌ぞなかりける
涙となげきそれのみか

うゝませ君よわが歌も

○
照る日かゞやく

照る日かゞやく夏の朝
花の園生をさまよへば
花はかたりぬ呟きぬ
されども我は黙したり
花は語りてさゝやきて
我をば見たり憐れげに

「わが同胞を愛しませ
かなしく青く見ゆる君」

○

汝がうるはしき

汝がうるはしき頬の上に
みゆるは暑き夏の色
小さき心にひやゝけき
冬のけしきはありながら

戀しき人よたちまちに

かはりゆくべし汝がさまは
頬には冬の色ながら
こゝろのうちには夏のどと

○

その光ある

その光ある雲井より
流れておつる星のかけ
さやかにわれの認めしは
愛のしるしのそれなりき

かぎりも知らず花も葉も
散るよ林檎のこずゑより
小枝ゆすりてふく風は
その葉とあそび花と舞ふ
池の白鳥こゑたてゝ
かなたこなたに泳ぎつゝ
歌聲低くひとかして
まづむよ清き水底に
静けくくらく今なりぬ

花さへ葉さへ散りはてぬ
み空の星もとびさりて
白鳥の歌また絶えぬ

○
暗のわが世に

暗のわが世に一度は
たのしき影のかゝやきぬ
それだにいまは消えはてゝ
夜こそつゝめたゝ我を

暗のま中にさまよひて
ものゝわびしくなれる時
子らは歌ふよ聲たかく
心のおそれ逐はむとて

狂へる子らに變らねば
うたふよ我も暗のうち
樂しきひときあらねども
おそれは逐ひぬわが歌は

○

おのが心

おのが心のいかなれば
かくは悲しくなりぬらむ
たゞそのかみの物語り
湧きこそいつれおのが胸

風冷やかに暮れそめて
ゆふべ静けしライン川
沈みゆく日の影うけて
かゝやきわたる山の峯

みめ美しきたをやめの
姿ぞみゆる山のうへ
黄金のかざりひらめかし
とくや黄金のみだれ髪
黄金の小櫛手にとりて
ときつゝ歌ふ聲すなり
あどろくばかり力ある
まらべをたかく懸かして

小舟こぶねこぎゆく舟人は
恐れそめたりその歌に
かくれし礁いぼ見もやらで
たもうち仰ぐ山の上
小舟の影も人かけも
たちまち沈む浪の底
あやしき奇しきまらべもて
かくなしつるよローレライ

涙おさへて

涙おさへて繁りあふ
森のこかげをさまよへば
こずゑの鶺鴒うたふなり
「なにとて君は嘆きます」

汝がはらからの燕は
なれに告ぐべしわが思ひ
戀しき人の窓ちかく
時さだむる鳥なれば

○
澄み上りたる

すみ上りたる月影に
隈こそなけれ浪のうへ
小女のうなじわがまけば
こゝろ空なり諸共に
人の腕にいだかれて
われは憩ひぬ岸の邊に
「吹きくる風にきくは何

なとうち震ふ君が御手

風のそよぎのゆゑならず
人魚のうたの響くため
波にしづみて年を経る
妹の聲の響くため

○

灰色なせる

灰色なせる雲の中に
いま大神ぞうちねぶる

彼等のいひき能はきく
荒きあらしはたゞそれよ

あらしあらしに憐れなる
我舟破れむ散はてむ
あゝこの風と主なき
涙とをたれか静むべき

あらしも舟のきしめきも
止めむすべのあらしは
我は纏ひぬうは衣を

神の如くに眠らむと

○

あらしは鳴りつ

あらしはなりつ笛ふきつ
舞踏のしらべ奏すなり
すはこそ躍れわが小舟
たのしくあらしこの夜半よ

—26—

生きてたる如き浪の山
怒れる海に起りたり

こゝに青淵湛ふれば
かしこにたらぬ白き塔

呪咀も吐瀉も唱名も
まじりてひらく舟の中
身を櫓によせかけて
われは思ひぬわが家を

○

—27—

君が門邊

君が門邊のゆきずりに

すがた小さく愛らしき
君をば窓に見つる時
よろこばしくも我なりぬ

黒みもまじる青き眼に
訊ぬるごとく君は見ぬ
なにとか名のる何なやむ
かよわき人よ見ぬ人よ

その國人にしられたる
我は獨逸のうた人ぞ

世にすぐれたる人数に
かずまへらるゝ我身なり

我なやみこそをさな見よ
その國人のなやみなれ
つよきなやみのその數に
數まへらるゝなやみなれ

○

海原とほく

海原とほく沈む日の

かげこそこのこれ波の上
ことばもなくて蟹が屋の
中にやすらふ君とわれ

霧たちのぼり汐みちて
とぶや鷗の影しろし
涙はあちぬ愛らしき
ゆかしき君がまなこより

眞白き君が御手の上に
おつる車をわれは見ぬ

膝をりふせて唇を
そのしたゝりに濕しぬ

思ひなやみてそれよりは
心もきえぬ身もやせぬ
さちなき君が涙こそ
傷りはてたれあゝ我を

○

波路の末

波路の末にはるくくと

街こそ見ゆれほのじろく
なごりの光につゝまれて
かすかに立てる塔の影

しめりはてたる夕風の
わたるもさびし波の上
かなしき櫂の音たてゝ
水夫ぞ漕ぐなる我が小舟

沈める夕日にはかにも
照りこそかへせ花やかに

こひしき人を失ひし
處をそことしめしつゝ

○

深きおもひ

深きおもひにうち沈み
人の繪姿みつむれば
はしき顔容は見るがうちに
生けるがごとくなりそめぬ

その唇はおもはずも

ゆかしき笑をもらしけり
愛の涙やどすごと
双のまなこはかトヤきぬ

頬をつたひて自づから
おのが涙もおちくなり
いかで思はむおもはれむ
この世の中に君なしと

○ 年のゆき

年の往來のはやくして
人は墓にぞくだりゆく
さはいへおのが胸の中に
のこれる戀の消ゆべしや

君を見るべしひと度は
きみが御前に膝をりて
心づよくもいひいでむ
「君をば我は戀ひせり」と

○

清くゆかしく

清くゆかしく麗はしき
汝は花にも似たるかな
さはいへ汝を見るときは
かなしき思ひぞおこるなる
汝がかしらにちのが手を
載せむとこそは思ふなれ
とはにゆかしく麗はしく
清くと神にいのるべく

その紅

そのくれなるの唇よ
その美はしきまなざしよ
はしき少女よをとめ子よ
われは思へり君のみを

冬の夜長のこのころを
きみとならびて語らひて
ふかさまほしく思ふかな

君がしめたる部屋にして
わが唇にあてゝみむ
白く小さき君が手を
あつる涙にうるほさむ
あろく小さき君が手を

○

もの恐ろしき

もの恐ろしき夢のごと
列なり立てり家のかげ

身をうは衣にまとひつゝ
黙して獨われは行く
御寺の塔にうつ鐘は
いま真夜中を告げにけり
その愛敬と接吻ともて
われをまつなりこひ人は
月こそわれの友どちよ
われを照せり親しげに
人の家居にゆきつきて

よろこばしさに我はいふ

「むかしの友よ我は謝す
わが來し道をてらしゝを
いまわれ汝とわかれなむ
汝は照らせよよそ人を
おもひ惱みて人しれず
戀にくるしむ人を見ば
汝はなだめよそのかみに
われをなだめし時のごと」

○

夜は來ぬ

夜は來ぬしらぬ道のべに
こゝろ痛みぬ足なへぬ
あゝさしくなり月かげの
静けきめぐみさながらに

あゝ心地よき月かげよ
夜のおそれを汝は逐ひぬ
こゝろのなやみを汝は消しぬ

わが眼に露をやどしつゝ

○

死は冷やけき

死は冷やけき夜にして
あつき日なれや人の世は
暮れゆくまゝにわれ眠る
盡の疲れにたへかねて

園さしちほひ茂る樹に
わかき鶯やどしめて

こひ歌たかく囀づれば
われは聞くなり夢にても

○

わが戀人と

わが戀人とわがをれば
心は空になりにけり
この大地もいかでかは
心の富にかへつべき
されども人の玉手より

分るゝ時となりぬれば
富もいつしか消えうせて
乞^た巧^まの如く身はなりぬ

○

とく起き出でゝ

とく起き出でゝ戀人の
來るかと問はぬ朝ぞなき
されども今日も來ざりきと
云ひつゝ詫びぬ夕ざれば

堪へぬ思に沈みては
ねぶりぞかぬる夜もすがら
なかばさめつゝ夢みつゝ
さまよひ行くよ明けゆけば

○

思ひ惱みて

思ひ惱みてたゞひとり
木の下かけをさまよへば
昔のゆめはひそやかに
こゝろの中に起りきぬ

梢の鳥よ 汝がうた
たれより汝は習ひしそ
歌ふなしばしそを聞けば
むねの思のまさりゆく

「歌をばたえずうたひたる
處女のことゝに來つる時
われら小鳥はうるはしき
黄金のことば習ひえぬ」

そをば語るな今更に
汝こそかかしき小鳥らよ
わがかなしみを奪ふには
よわきに過ぎぬ汝が力

○

父の御園

父の御園に青じろき
花こそ匂へかなしげに
冬過ぎ春は來つれども
かはるともなしその色は

病をうけし花嫁の
なやみに堪へぬ如くにて

「我を摘みませ 同胞よ」
花はかたれりひそやかに
されどもわれは答へけり
「われ摘みとらじ摘みとらじ
われは勵みて苦みて
紫の花もとむれば」

青白き花またいひぬ

「君が命をつくしても
求めてもみよその花を
見いでむ時はあゝいつぞ
我を摘みませそをおきて
君の如くに病む我を」

花のねがひの切なさに
をのゝきながらとく摘めば
さわぎし心しづまりて
憂はれたりにはかにも
傷にいためる胸の中に

たかきたのしみ起りたり

○

たのしき五月

たのしき五月いまは來ぬ
木草の花はさきみちぬ
空の緑をよこざりて
薔薇色の雲たもとひぬ
瑞枝さしそふ梢より
鶯のうたひとくくなり

三葉のみどり柔らかに
小羊のむれ飛びめぐる

歌はずとばず病みはてゝ
ひとりわれ臥す草のうへ
遠き響を耳にして
それともわかず夢みつゝ

○

千度八千度

千度八千度とび繞る

蝶と薔薇はあもふどち
されど黄金の色なして
かれをめぐれり日の影も

誰と薔薇はあもふどち
われは知らまし知りてまし
歌を絶えぬうぐひすか
黙だしはてたる夕つとにか

薔薇の心しらねども
われは愛せぬものぞなき

薔薇も蝶も日のかげも
はた夕づゝも鶯も

○

春の夜風

春の夜風のぬるければ
さき残りたる花もなし
心どもなくわが居れば
愛のちもひにまたなりぬ

いつれの花ぞわがむねに

堪へぬ思をちこそする
なくね絶えせぬ鶯は
そは白百合と告げぬべし

○

あきらけき眼

あきらけき眼を君もたば
さだかに君は認むべし
かなたこなたにさまよへる
處女のかげをわが歌に

さやけき耳を君もたば
君はきくべしその聲を
彼れはなげきてはた笑みて
うたひて君を迷はさむ

彼はことばにまなざしに
わがごと君をまどはせば
楽しき春のゆめを見て
君はゆくべし森かげを

○

みどり色濃き

みどり色濃き君が眼の
やさしく我に向ふとき
ものも言はれずなりにけり
夢みる如きこゝちして

緑いろこき君が眼を
おもはぬ時こそなかりけれ
みどりの海はたちまちに
心のうちに溢れつゝ

○

逆捲きおこる

逆捲きおこる荒浪に
やどれる影ぞさだまらぬ
静やかにいたのどやかに
月はみ空をさまよへど

君はしづかにのどやかに
わが居る前をさまよへど
胸のかげこそさだまらぬ

心の涙のしほ立てば

○

心にながく

心にながく捨てはてし
面影またもうかぶかな
きみがことばの中にして
身にしみたりしものや何

我を戀ふとな君いひそ
人のこの世にめでたきは

たゞそれ春よたゞ愛よ
そはたゞ恥となりぬべし

我を戀ふとな君いひそ
接吻せよ笑めよもの言はで
しほみはてたる花薔薇
明且君にみせむとき

○

月影うけて

月影うけて菩提樹の

花の香たかくかゝるかな
さへづりかはす鶯の
聲のひまかぬ隈ぞなき

こひしき君よ木のもとに
やすらふ宵の樂しさよ
黄金色なす月かげの
まげみを漏りて照らす時

見よ菩提樹の葉をば見よ
心臓こころの形したらずや

されば戀する若人は
この下かげに憩ふなり

君は笑わらむなり遙なる
のぞみの夢に入りしごと
語れ戀人むねのうち
いかなる望おこりしかし

わが戀人よ君にわれ
かたらむとこそ思ふなれ
あはれつめたき北風の

俄に雪にかはる日を
毛皮よそひて二人して
かざれる襦に身をのせて
鈴ふりならし鞭ならし
川越え野越え走らむと

○

とく森かげに

とく森かげに見いてつゝ
めしたに贈る花すみれ

のころ日かげに摘みとりて
夕にはこぶ花蓄薇

君は知らずや美はしき
花のおもへることのはを
「晝はひねもす誠にて
夜はよもすがら愛しませ」

○

黄金の光

黄金の光そらに曳き

ひそかに星はさまよへり
夜のもすそに眠りたる
この世の夢をさまさじと
木の葉の耳をそばだて
森こそ立てれしづやかに
山は夢みるすがたにて
かげの腕をぞひろげたる
かしこに呼ぶは何ならむ
つよくも胸に響くかな

戀しき人のことのはか
はた鶯の歌どゑるか

○

今年の春

今年の春のわびしさよ
かなしき夢のつとくかな
つらき思をうぐひすの
聲にもらせりさく花は
あゝほゝゑむな戀人よ

喜ばしげにほゝ笑むな
あゝたゞ歎けたゞ歎け
涙はわれぞ拭はまし

○

静けき磯

静けき磯に夜はきぬ
月は雲間をはなれたり
よする漣さゝやきの
こゑぞほのかに聞ゆなる

「かれは愚かしからずば
戀になやめる人なるか
かなしと見れば嬉しげに
うれしとみれば悲しげに」

月は空よりほゝ笑みて
こたふる聲も爽やかに
「戀する人ぞをこ人ぞ
またそが上に歌人ぞ」

○

影ほのぐろく

影ほのぐろく立つ涙を
翅にかけて飛びめぐる
しろき鷗をわれぞ見し
月はかゝれり中空に
涙をやぶりて音たかく
をどるは雛よはだ鱒よ
鷗は下りつまた立ちつ
月はかゝれり中空に

飛びかける魂愛しき魂
汝はかなしく心うし
汝はあまりに水近し
月はかゝれり中空に

○

我をば君が

我をば君が戀ひせりと
とくより我は知りたりき
されども我はをのゝきぬ

君がことばに出てしとき

いたゞき高く登りゆき
われは歌ひぬ山のうへ
磯邊の道をさまよひて
われは泣きたり沈む日に
燃ゆるが如き天つ日の
姿なしたりわが心
はてなき愛の海原に
照りかゝりやきて沈みゆく

○
黒みわたれる

黒みわたれる帆をあげて
わが舟はしる波の上
君が與へし苦しさも
こゝろの憂さも君ぞしる
君が心は吹きかはる
風のこゝろに似たるかな
くろみわたれる帆を揚げて

我舟はしる波の上

○

君がなしたる

君がなしたるたは業も
われは隠せり世の人に
されど百重の浪わけて
我は告げたり鱗介うろこに

人のこの世に我はた
君によき名を残すとも

はてしも知らぬ海原は
知るなり君がたは業を

○

鷗はなとて

鷗はなとてわれらをば
いぶかしげには眺むらむ
そはたゞ強く我耳を
汝が唇にあてたれば

汝がいひ出てもことのはを

知らむと鳥は思ふべし
汝がわが耳に接吻すとも
ことのはばかり満たすとも

我は知らましわが胸に
響きわたるは何れぞと
ことばも接吻もいとしく
心のうちに亂れあふ

○

わたのみ中に

わたのみ中に年経たる
巖いわのうへにももの思へば
鷗叫うしなびぬ風あれぬ
浪さかまきぬ泡立ちぬ

我は愛しぬうるはしき
めてたき人の數々を
されど彼等は今いつこ
風たゝあれぬ浪あれぬ

増補

痛み苦み

痛み苦み身を去れば
眠りぬわれはおだやかに
よにうるはしさ少女子の
より來しことも夢の中
大理石なせるその顔容
眞珠とまがふその瞳
奇しくも髪をゆるがして

おどろくばかり密やかに

おだやかに
少女は身をば動かして
よりかゝりたり我胸に
顔青じろき少女子は

わが胸うちぬ燃えたちぬ
樂みいたみうちませて
されど氷とまがふまで
少女の胸は冷やかに

「氷の如くひややかに
脈搏^たひともせずわが胸は
されども我はよく知りぬ
愛のいたみも勢力も
わが唇にわが頬に
のぼる紅^{くはな}かげたえて
胸に血汐の流れなし
されども我はたゞ君に」

痛みを胸におもふまで
彼れは抱きぬわが身をば
鶏なきぬ——聲もなく
少女の姿消えさりぬ

○

ありとむかし

ありしむかしの面影の
うかぶもはかな胸の中
あゝわれ君がかたはらに
楽しく過ぎしそのかみよ

眞晝の路を夢みつゝ
涙ぐみつゝ、黙しつゝ、
よろめき行けば行き通ふ
人ぞあやしとわれを見し
夜としなれば人もなし
時こそいまと八衢を
われとわが影二人して
其處ともわかすさまよひぬ

靴音たかくひゞかして
橋うちわたりわが行けば
雲のひまもる月のかけ
さしこそ來つれおとそかに
君がすみ家の前に來て
君がよりそふ窓たかく
あふぎ見すればいとしく
こゝろのいたみ加はりぬ
窓の戸あけてともすれば

大路見し君われは知る
月かげあびて佇める
我を見し君われは知る

○

梢に秋の

梢に秋の風立ちて
夜の氣寒き森のかげ
黒き上衣に身をつゝみ
われたゞ獨騎りて行く

騎り行くまゝに言ひしらぬ
こゝろもわれにのりて來ぬ
胸すゝやかにひそやかに
われぞ近よる妹が門

吠えたつ犬の聲聞きて
下し僕は出でぬ燭とりて
めぐるきざし階とくふめば
ひゞく柏車のおとたかし
かをりゆかしく暖かく

絨氈じとねかゝやく部屋の中
われを待ちたり戀人は
われは急ぎぬその腕に

木の葉を風のわたるよと
思へばひしく櫂のこゑ
「をこなる夢にふけりつゝ
をこなる君よ何おもふ」

○

蟹のこまや

蟹のこまやにやすらひて
海原とほく見わたせば
ゆふべの霧はほのじろく
立ちこそわたれ波の上

燈臺の火はともされて
波路あかるくなりゆけど
沖邊はるかに漕ぐ舟の
しら帆のかけはなほさだか
われらは云ひぬ波かせも

くだけし舟も舟人も
よろこびうれひ水空の
なかにたいよふなりはひも

われらは云ひぬ遙なる
北の南のあらし磯も
そのめづらしき國民も
その世にしらぬならはしも

口かげもかをるカンケスに
しらぬ大樹ぞしげりあふ

姿ゆかしくしづかなる
人はをるがむ花はちす

人もけがれぬラランド
平たきかしら廣き口
小さき身長の火にかゝみ
魚焼きながら叫びあふ

耳そばだてゝをどめ子は
聞き耽りたりもの言はで
いつしか海はくれはてゝ

ありし帆影もなくなりぬ

○

橙の色

橙オレンジの色あざやかに
雲間に月のやすらへば
海のおもてはかいやきて
黄金のすぢはひろどりぬ
うつ波しろきあら磯を
われたい獨さまよへば

世にもゆかしきかたらひの
こゑこそ響け波間より

あゝ夜のながさわが心
いま黙もくされずなりにけり
姿やさしきニックスの
來ては舞ひつゝ歌ひつゝ

心も身をもまかせたる
わがかしらとれ汝が膝に
うたひて抱だきて命をも

キスし去らなむわが身より

○
かさなる雲

かさなる雲のひまどめて
さやけき月のかげさせば
忘れはてしそのかみの
面かげまたもらかぶかな
甲^{ツキ}板のうへにうちつゑひ
ほこりてくだるライン川

のこる夕日にうち煙る
牧場の草もいろさやか
姿やさしくうるはしき
をどめのそばにわが居れば
青みもまじるその顔に
あかき日かげは戯れつ

琴のねひいき稚^ち兒^ごうたふ
この世にしらぬたのしさよ
雲はいよくはれゆきて

心はそらになりけり

城も木立も山も野も
うつゝともなく過き行けど
をどめの睡さながらに
うつせるかげをわれを見し

○

縦の大樹に (Berg-Idylleの中)

縦の大樹に風鳴りて
月すみわたる山の上

こゝに年ふる山人の
小屋こそ一つ立てるなれ

驚くばかり膨られつゝ
中に置かるゝその椅子に
よりなば幸はいくばく母
その幸得たる今のわれ

少女は臺に坐をしめて
手をは置きたりわが膝に
星と照りたる双の眼よ

薔薇どにはへる唇よ

ゆかしく青き双の星
空にあるごとわれを見ぬ
白百合なせるその指は
動きぬ薔薇の花のうへ

母は糸くるいそしみに
われらの方を見おこせず
父はむかしの歌誦して
ひとり小琴をかなづめり

胸にひめたる秘事を
心ゆるしゝわが耳に
少女は告げぬひそやかに
聞えぬばかりひそやかに

わが叔母君のうせまして
市に行く日はなくなりぬ
あな美しと見つゝこし
きそひの庭も今はよそ

風冷やけき山の上は
市のちまたに異なれり
冬としなれば日數ふる
雪にわれらは埋れつゝ
物怖ぢすなるわが身とて
夜な夜な出でゝ狂ふなる
山のすだまのかけ見れば
わらはべのごとど慄くよ

云ひも果てぬに少女子は

おのが語にかそれけむ
にはかに口を緘みつゝ
眼をばおはひぬ双の手に

外には樅のかせ高く
うちには響く糸ぐるま
小琴のしらべさえく
猶もきこゆる歌のこゑ

「おそるゝ勿れ少女子よ
悪しきすだまは狂ふとも

天つをとめはいつとても
君を守らむ少女子よ

○

かゞやまそむる

(Auf dem Brocken)

輝きそむる朝の日に
東の空はあからみぬ
はてなき霧の中
峯こそうかべ遠近に

— 88 —

長き靴をしわが持たば
風の早さを走るべし
かしこの山の峯こえて
はしき少女の家近く

また夢さめぬ臥床より
軽く窓掛ひきささりて
かるくさゝせむその額を
ルビーに似たるその口を

— 89 —

軽くもわれはさゝやかむ
小百合なしたるその耳に

「夢にも思へ相おもふ
君とわれとは離れじ」と

附 録

ハイネリッヒ、ハイネ子評傳

ハイネは、彼れの時代に於ける、尤も卓絶せる一人なり。遂に、一の反響を喚起することなくして、罷ありと雖、彼れの聲は、眞の聲なり、……シヨース、ニリチャイト

「ハイネリッヒ、ハイネ子」は、一千七百九十九年十二月十三日、「ライン」河畔「ヂニセルドルフ」に生る、其父は「サムソン、ハイネ子」、其母は「ベチイ」、共に其

統を猶太にうつくるもの。其父の家、世々、尋常商賈たるに反し、其母系中、時に、文事に長じ、科學に名ありしものありきといふ。而して、ベチイは温良貞淑、尤も常識に富みたりといへども、また、頗る感情的傾向を有し、まゝ常規を失するものありしが如し。此性情や、甚しく、其子に遺傳したるものあるは論なきなり。

ハイチの幼時、チュッセルドルフは、佛蘭西の大公爵の居處となれり、これ、「プレスブルグ」の和議の結果として、佛に交附せられたるに因れり。故を以て、先づ、此幼兒の腦裡に印象せられしものは、即ち、佛蘭西人なり、佛蘭西風なり、佛蘭西語なりしなり。ゲーテ曰く、幼年の記憶は、決して移すべからず、と、眞に然り。ハイチが、後年、佛を愛し、其郷土を捨て、其國に

轉し、遂に、巴里の客舎に没せしが如き、其因、實に爰に存せるを見るなり。然れども、彼れが、終生、其故國に對して熱情を有し、夢寐、其國人と自己とを一致するを忘却せざりし者、其天倫に出づるありといへども、又、其母の教化によるもの多きに居らずんばならず。何となれば、彼れの母は、其同種族が、獨人の凌辱するところとなるに關せず、常に、彼れに教ふるに、其郷土を愛し、其の國民に親むべきを以てしたればなり。ハイチ、初めは、母の教育の下に在りしが、稍と長ずるに及んで、一私立學校に送られ、次で、一部は軍隊的にして、一部は宗教的なる、佛人の校舎に入學せしめられたり。然れども、こゝに授けられたる街學的の教課は、性情彼れの如き兒童に適せず、遂に、其同學者に廢物の讒を受くるに至れり。彼れが後年、盛に譏刺の語を

なし、嘲罵の筆を弄せる、此間に養成せられたる偏僻の性、大に、其因をなせるものあるなり。もとより、彼れは、幼よりして、偏固の風あり、而して、空想に耽るを好み、神秘的説話を聞くを愛せり、長ずるに及んで、此傾向著しく増加し、遂に、其結果として、激動的の性格に、加ふるに、種の狂熱を以てせり。

十六才にして、彼れの父は、彼れをして、商業に従事せしめむと欲し、彼れを、「フランクフォルト」の銀行家に送れり。彼れ、爰に在る、僅かに二閱月、其性格の、全く、商事に適せざるを知り、絶望して、其父に歸來せり。然れども、一年或は二年を経て、更に、「ハンブルク」に至り、再び、商務に執掌せしが、彼れは、其事業に對して、全然、趣味と熟練とを有せず、而して、たゞ、

作詩と讀書とに耽りしを以て、早く業に、其破綻を示せり。一千八百十九年の春、彼れの事業は、精算せざるべからざるに至りしが、彼れの叔父にして富有の銀行家なる、「ソロモン、ハイチ」の、來援するに會ひ、幸に、其終を全くすることを得たり。

此の如くにして、彼れは、其事業に於ては、得る處なかりきといへども、「ハンブルク」の滞在は、全く、時日の浪費にはあざりき。乃ち、彼は、甚だ獨逸文學に通曉するを得、又、「エンゲ、ライデン」中に收めたる、優美なる詩篇を作るを得たり。彼れの、叔父は、彼れの到底商業上に成功する能はざるを見、彼れをして、轉じて、大學に入り、法律學を研究せしめたり。爰を以て、彼れは、同年「ポーン」の大學の學生となれり。此學生々活の間、叔父は資を

給すること十分なりきといへども、彼れの戀着せし、彼れの女を以て、彼れに許すことをなさいりき。彼れの、此戀愛や、その生涯中、尤も永續せしものにして、且、その詩篇中、尤も、吾人の贊美と、同情とを高むるの因をなすものなり。然れども、彼れは、これが爲め、其教課を忽にせしことなく、その「シュレーゲル」の講義の如きは、尤も、熱心に傾聴せりきといふ。翌年秋、彼れは、ある事情の下に、轉じて、「ゲッツチンゲン」の大學に入學し、法律よりは、寧ろ、獨逸史、及び其文學の研究に勉めたり。居る事、暫らくにして、事ありて、此地を捨て、直ちに「ベルリン」に赴けり。こゝに於て、彼れは、「ハイゲル」「ヘルンハーゲン、フォンエンセイ」、及び其有名なる夫人「ラヘル」等と、交を結びたりしを以て、彼れの文學的天才は、大に發達の歩式を

進め、其結果として、詩篇に親み、法律に遠ざかるに至れり。

一千八百二十二年、彼れは、初めて、其作、悲劇「ラートクリッヘー」及び「アルマンソール」を出し、之に加ふるに、「リリツッセス、インテルメツッオー」を以てせり。前二者は、更に世評に上らざりきといへども、後者は、大に一般の賞賛を博し、彼れの名は、直ちに、叙情詩人の列に加へられたり。彼れが、其後兩親を「リニューチアルク」に省みし時、光輝ある詩人生活の基礎をなせしを誇稱せしといふを見るも、彼れの此時の喜悅、察知するに難からざるなり。

一千八百二十三年の七月に至て、彼れは、「ヘルリン」を去て、北海に濱せる「クックスハーベン」に赴けり。彼れ、もとより、神經的頭痛に苦めり、而して此病勢は、年を逐うて劇甚となり、其睡眠も、其詩文の卓絶の要素とな

れる、狂熱的困夢の、攪亂するところとなりしを以て、此行を起すの止むを得ざるに至りしなり。翌年の初めに至て、彼れは再び、「ゲッテンゲン」に歸り、更に、法律學の研究に従事せり、此間、「ハルツ」山に向て登臨を企て、「ハルツライゼ」なる光彩ある記行を草し、又「ワイマール」に赴き、「ゲート」に面晤せり。一千八百二十五年の夏、彼れは法律學士の試験を通過するを得たり。此に先じて、其信仰を變じて、基督教徒となり、新教徒の員に加はり、其名「ハリー」を改めて、「ヨハン、ハインリヒ」となせり。彼れの、此の如く、新教徒となりしは、彼れが、其創立者を目して、思想の自由解放者として、嘆美せし故のみにあらず、其信仰個條に向て、尤も同情を有せしを以てなり。彼れの叔父は、彼れの成功を喜び、多分の資を給せしを以て、彼れは、「ゲッテ

ンゲン」を去て、「ノルデルチー」に行き、その健康の回復につとめ、傍ら、其詩、「ノルドゼーヘルデル」の最初の部分を草せり。歸來、彼れは、居を「ハンブルク」に定め以て、法律事務に従事せり。然れども、彼れは、畢竟、詩人にして、法律家にあらず、故に、此企圖も、また、失敗を以て了れり。

一千八百二十六年、彼れは、「ライゼイヘルデル」の最初の部分を出し、加ふるに、「ハルツライゼ」、及び「ヂー、ハイムケール」を以てしたりしが、大に世の賞賛を博得したり。彼れは、これによりて、己れが天職の在る處を知り、次て、「ライゼヘルデル」の第二冊を出せり。此書は、「ノルドゼーヘルデル」の、第二の部分に、「ノルデルチー」島の記事、及び其他を加へたるものなり。此に由て、彼れは、當時、獨逸に於ける、尤も名聲ある文人を以て、目せらるる

に至れり。而して、其記事中、「ナポレオン」を尊崇し、且、當時の革新的政策を推奨せるものあるが故に、全獨逸、及び澳大利に於ては、其發賣を禁止せられたりしかば、これが爲め、却て、世上の好奇心を喚起し、其讀者はますます増加した。此の如くにして、彼れは知らず識らず、政治の範圍に、侵入したりしが、これ遂に、彼れが、詩人に兼ねるに、政論記者を以てするの因をなせり。乃ち、彼れは、「ライゼホルデル」の好評に激發せられ、政論記者となり、且、實行的政治家の性格を養はむと欲し、轉じて、英吉利國に赴けり。彼れは、元來「ノルデルチー」の歸後、定住せる「ハンブルク」を愛せざりしを以て、其處を去て、英に入るは、寧ろ、其適意とするところなりしなり。彼れの叔父は、彼れの企畫を贊助し、又豊かに、其資を給せしを以て、一千八

百二十七年四月、彼れは、居を倫敦に定むるを得たり。

彼れの、倫敦に對する感想は、「イングリッシュイー、フラグメンテ」、及び其私信によりて、見ることを得べし。倫敦は、もとより、喧嘩熱鬧の地、常に、神經的頭痛を病める詩人に向ては、たゞ、失望を齎すに過ぎざりしなり。其政治界、及び議院は、大に、彼れを感動せしめしといへども、其當時、萎靡せる文學界は、また、彼れを満足せしむる能はざりしや論なし。その八月、彼れは、遂に、得る處なくして、英國を去れり。

英國の歸後、彼れは、又、「ノルデルチー」島に赴けり。先きに、彼れは、「ライゼホルデル」中に、此島を記載し、「ハノーベル」人の、貴族政治を攻撃せしも、猶、忘るゝこと能はずして、こゝに至りしなり。此年秋、彼れは、また、「ハ

「フナルク」に行き、其舊作を集めて刊行せり。これ乃ち、「フッフェル、リーデル」なり。其形式に於ては、多少の非難を免かれざるも、其聲調の流麗なる、其想像の自在なる、其言辭の華美にして、しかも、單純なる、而して、處々、諷刺譏誚の意を點綴したる、多感詩人の面目、躍如として、楮表に現出し、一讀、卷を掩ふ能はざるものあり。彼れの名聲は、これに由て、いよ／＼重きを加へ、遂に、「グーテ」に次げる、叙情詩人を以て、目せらるゝに至れり。詩人として、彼れは、此の如く、成功せりきといへども、猶、政論記者たらしむと欲し、「ムンニヒ」に於て、刊行せられたる、「ポリチッシェー、アンナーレン」、及び他の「コタ」の定期刊行物に執筆したり。然れども、彼れは、また、これに適せざりき。乃ち彼れは、嚴密なること能はず、規律を遵奉する

こと能はず、加ふるに、輿望のあるところを知らず、而して、其政治的同情も、畢竟、詩人的感想なりしを以てなり。

一千八百二十八年七月の末、此刊行物も、また、失敗に了りしかば、彼れは、「ムーニヒ」を去り、以太利に向て、週遊を企てたり。此旅中、作るところのもの、題して、「イタリエン」といふ。此間、彼れは、俄かに、其父を想起し、思慕の情に堪へず、直ちに、「フロレンス」を捨て、「ベニス」に至りしに、其危篤を耳にせり。此に於て、急行、「ユールブルク」に達せしが、遂に、其死去の報を得たり。

父の死去は、孝心深き彼れをして、痛哭せしめたり。爾來彼れは、家に歸りて、母と共に、其の後事に従ひしが、事終て、一千八百二十九年の春、又「ベ

ルリン」に出でたり。その翌年、彼れは、「ライゼベルデル」の第三冊を公にせり。當時の文壇は、これが爲めに、頗る騷擾せしも、其詩、荒涼の風を帯べるが故に、非難の聲もまた從て高く、其友人すら、猶、之を難詰せり。彼れの多感なる、これに堪ふる能はず、遂に、其友「モーセル」と絶交し、又、「プラーテン」とも、相容れざるに至れり。

此時、彼れは、轉じて「ハッゴランド」にありしが、こゝに、巴里に於ける七月の革命の、驚くべき報知に接したり。彼れは、之を聞きて、滿腔の熱情、禁すべからず、巴里を翹望して、其革新の風、早く世界に瀾漫せむことを希へり。翌三十一年の初め、彼れの政治熱は、いよく加はり、一文を草して、巴里の革命に、熱心なる賛辭を呈せり。然れども、革新の進行、猶、緩漫な

るものあり。此に於て、彼れは、斷然、獨を去りて、佛に入れり。これ實に同年五月なりき、彼れの、此行の目的は、自己を以て、佛と獨との聯鎖となし一方には、獨の新聞に寄稿して、佛の政況を報じ、他方には、佛の書肆に托して、其詩篇を、其國に公にせむとするにあり。これによりて、彼れは、先づ、獨の有名なる新聞、「アウスブルゲル、アルグマイチ、ツァイツング」、及び其の他に、政事的論文を寄せ、「モルゲン、フラット」に、美術展覽會の一般報告をなし、また、「バルツライゼ」「バーデル、フォン、ルッカ」等の一部を佛譯して、佛の雜誌に投ぜり。此後者は、著しく、佛人の注意を喚起したりしが、次で、「フランチエーション、シエー、ツイスタンテ」の佛譯を出すや、其名聲、更に大に揚れり。此成功に激發せられて、彼れは、一千八百三十四年、獨逸の宗

教史、及び哲學史に關する論文を出せり。然れども、この文中に點綴せられたる、嘲諷及び暗刺は、之を釋するに、獨逸文學の精通を要するを以て、其趣味を有せざる佛人には、遂に、理解せらるゝことなくして了れり。

佛に於ける不成功に反し、彼れの此論文は、甚しく、獨逸の人心を擾亂せしを以て、遂に又、全獨逸、及び澳大利に於ては、彼れの從來、及び後來の著書、悉く發賣を禁止せらるゝに至れり。この精神的黜罰は、獨逸政府に對する、彼れの怨恨を助長せしが故に、彼れは、盛んに、諧謔諷刺の筆を弄し、これに報ゆる所あり。然れども、彼れ個人としては、甚だ尠なく、專制獨裁の風を脱却せしめむとする希望より來るもの、其尤も多きに居れり。

此時に當て、巴里に流寓せる獨人中、有名なる公法學者にして、且、巧妙なる

文章家なる「ルードウヰッヒ、ベルチ」あり。嚴格にして、且眞率なる共和黨員にして、ハイチが、未だ、商務に従事せるの時、早く、既に、政論記者として、名ありしなり、ハイチは、當時獨逸に於ける自由的運動に對して、彼れと、全然、反對の意見を有せり。始め、兩人は、相提携せしが、ハイチは、嘗て悉く、革命的の議論を稱賛したりしかば、彼れは、公然、其所論の、革命の原因を輕々に看過せるを非難せり。これより、遂に、全く相和せざるに至れり。

「ベルチ」の攻撃は、頗る、激烈なりしが、ハイチは、これに對して、表面上、何等の答辯をも與へざりき。然れども、「ベルチ」の死後に至て、「ルードウヰッヒ、ベルチ、アイチ、デングシュリフト」と題せる、訛議の文を公にせしかば、人々

皆、彼れの性格の陋劣なるを言れり。而して、此文中、「ヘル、ストラウス」の夫人の名譽を傷けしものありしを以て、「ストラウス」は、怒て、彼れを、街路に漫罵せり。彼れ堪ふる能はず、遂に、彼れに約するに、決闘を以てしたり。一千八百四十一年七月七日、兩人相會して、互に短銃を擬し、「ストラウス」先づ射る、丸、「ハイチ」の臀部を擦過せり。ハイチ次て射る、また中らず。兩者幸に、事なきを得たり。然れども、ハイチは甚しく、其對手を嘲罵せしを悔い、爾後、輕卒なる譏誚を謹めり。

此間に在て、「ハイチ」は、「マチルド、クレセンス、ミラー」と情交を結べり。「ミラー」は、容色絶美なりしを以て、求婚者頗る多かりしも、皆斥けて受けず、遂に、「ハイチ」と「サンスルボス」の會堂に、結婚の式を擧げたり。此結婚は、

幸福にして、又、不幸なりき。何となれば、「ハイチ」は、當時困厄の地位に在り、而して、其妻に、安易と、快樂とを與へむと、欲せしを以て、知らず識らず、秘かに、佛政府より恩給を受くるに至れり。此事實の、普く流布したるは、一千八百四十八年にあり。彼れは、辯解頗る勉めしも、これ、明らかに、彼れの生涯に、汚點を印したるものなりしなり。

佛に於て作られたる、彼れの詩文は、一千八百三十九年以來、「デル、ザロン」なる名の下に、刊行せられしが、四十年に出されざる第四卷、即ち、最終の卷は、有名なる小説的短篇「デル、ラヒー、フォン、バハラ、ハ」を含有せり。猶、彼れの詩にして、光彩ある、「アタトロイル」(一千八百四十一年)、及び「トイッチェランド」(一千八百四十四年)等は、漸次、刊行せられたり。これ等は皆、文學

的、政治的の嘲諷を含みたるものにして、又獨逸の輿論を喚起したりしかば、普魯西政府は、非常の嚴密を以て、彼れの著書の發賣を禁遏せり。彼れは、此の如くにして、全く、其故國の放逐者となりしかば、其老母、及び老叔父を顧みるにも、亦少なからざる困難ありしなり。乃ち、普魯西公使は、其國土の通過を拒絶せしかば、其「ハンブルク」に到るも、「ホルランド」より、迂回せざるべからざりしなり。

已にして、彼れは、其叔父の死去にあへり。彼れは、ハイチに、終始、資を送ること豊かなりしか、其子「カール」は、全く、之を停止せしを以て、ハイチは、大に失望し、其極、神經麻痺の病を得たり。これ、其死に至るまで、彼れをして書稿止まざらしめしものなり。彼れは、初め、其明を失ひしが、猶、歩行する

に困まざりき。然れども、一千八百四十八年五月、巴里市中の散歩より、歸るや、遂に、病床に倒れ、また、起つこと能はざるに至れり。

彼れは、病床に在りて、其妻、及び「ラ、ム、シユ」と呼ばれたる一貴女より、懇切なる看護を受けしが、其頭腦は、甚だ明確なりしを以て、一千八百四十九年、多くの詩篇を草し、又、五十二年、「ロマンタクロ」を作り、後更に、「レツツテ、ケチヒテ」の名を以て刊行したる多くの詩、及び他の多くを篇せり。斯の如くにして、此多感にして、天才ある詩人は、一千八百五十六年二月十七日、遂に其巴里の客舎に永眠したり。

彼れが死に先だつ一年、獨の歌者の伴、巴里に來れり。彼等の歌ふところにして、尤も、聞くべき者は、彼れの詩なりき。彼等、「ハイチ」の瀕死の狀を聞き、其

巧妙の名ある者數人、相率ゐて、彼れを病牀に訪ひ、以て、彼れが詩を歌ふ。彼れ驚喜して曰く、これ、歌の尤も俊拔なるものなり、わが詩思を歌ふ、何人か我れに勝るものあらむや、と。これ、實に、彼れが、獨逸より受けたる、最後の禮なりしなり。嗚呼、獨逸、此多感なる詩人の生れたる處、法外者として、擯斥せられたる處、而して、彼れの詩の、永久にわたりて、吟誦せらるゝ處にあらざや。「ハイチ」の天才は、其形式の多様なるところに就きて、見るを得べし。而して、これ、實に、文人として、精密なる、且、確實なる評價を、彼れに下すこと、能はざらしむるものなり。彼れは、詩人としては、殊に、「アリストファネス」、「メイロン」、及び「ペーリッス」に類し、文章家としては、「ステルチー」、及び「シュアン」に似たり。然れども、此類似や、彼れの天才が、如上の詩人、及

此諧謔家の卓絶せる特質を結合せるに由れり。而して、猶、彼れは、其結合に捺するに、自己獨創の印を以てし、決して、其模倣を許さざるを見るなり。實に、彼れが、詩人、及び諧謔家の兩方面を具備せるは、意想外の事に屬し、従て、彼れの聲價の大部分は、これによりて、博得せられたるものなり。彼れの、最初に公にせる詩篇は、簡潔にして、寸鐵殺人的の叙情詩なり。而して、彼れは、之に與ふるに、其時代精神に、尤も適應せる形式を以てせり。乃ち、此時に當て、獨逸國民は、已に、詩的製作物、殊に、感情的製作物に飽けり。自由戦争以來、昏睡病的顯象に在り。新ゲーテ、新シルレル出づるも、決して、傾聽せられざる状態に在り。故を以て、彼れの詩の如き、簡潔にして、優美の情に富み、而して、意外なる機智的、諧謔的結尾を有するものは、

自づから、國民の困夢を覺醒せしを以て、遂に、新春の先驅として、獨逸人中に散布せられ、傳誦せらるゝに至りしなり。

彼れの詩形の特質は、一瞥以て、之を評することを得べし。乃ち、容易に、其全軀を理解せしめ、肥臆せしめ、同情の念を惹起せしめ、覺えず、唇邊に微笑を湛へしむるにあり。屢優美なる不規則に起因せる音樂的、聲律的の個處あるにあり。他の詩人には、殆んと見るべからざる言辭の單純素朴なるにあり。「マ、シエーアールド」、彼れを評して曰く、「ハイチ」の、詩的形式を用ふるに妙なるは、よく匹敵するものを見ず。彼れは、主として、古獨逸の名詩の形式を用ふ、乃ち、吾人の歌曲の形式よりは、一層、迅速と、優美とを有せるもの是れなり。彼れの、之れを用ふるや、十分の輕妙と、容易とを以て

す。而して、其固有の充實と、情熱と、及び其形式に存する古色とを失はずと。これ、蓋し、其當を得たるものならむ。

詩形に於ては、確かに、彼れは據るところありといへども、其内容に至ては、全く、彼れ獨得の思想にして、決して、他人の蹈襲ならざるなり。其詩中、徃々、他人と類似する處ありといへども、もとより、少數にして、且、偶然的なるもののみ。之に反して、不成功なる、彼れの模倣者は、甚だ多きを見るべし。實に、彼れの詩の、單純にして、輕快なるは、凡庸詩人をして、模倣の容易なるを思はしむるも、其用語の素朴、己に模すべからず。加ふるに、其詩の至妙の要素たる優麗雅馴に至ては、到底、彼等の企及すべきところにあらず。

「ハイチ」は、詩人として、新徑路を拓きしのみならず、又、文章家として、散文の新體を創製せる功績を有す。乃ち、彼れは、適當に使用せば、獨逸語を以て、平易と、優美とを現し得べきを示したる最初の人なりしなり。彼れは、猶、其文中に、機智的、滑稽的、及び聲律的、詩的の語を挿入し、これに由て、獨逸文學に希有なる感情を含有せしめたり。而して、其表示中、確かに、大膽に、且、驚嘆すべき者ありしを以て、爲めに、街學的批評家の怒を買へしなり。彼れの文中、ある者は、「ルーテル」の「クラフト、アウスタルック」に類似せり。然れども、これ、決して、一時の遊戲にあらず。彼れの心中、明瞭の意志ありて、こゝに至れるものなり。而して、此部分は、翻譯家は、絶望して、其手を束ぬといへども、少しく見識ある讀者は、直ちに、能く了解し得る處

なり。猶、其表現に關して、言辭の選擇に苦心せる、彼れの如きは、蓋し尠なし。其文のみにあらず、其詩に於ても、輕々、叙し去て、更に推敲を費さざるが如きも、今猶、保存せらるゝ其草稿を検すれば、塗抹縱横、直ちに、其苦心の容易ならざるを察知し得べし。

彼れの多量なる散文の題目は、其範圍、極めて廣く、此點に於ては、確かに、其詩を凌駕せり。彼れは、哲學に屬すると、美術、文學、及び自然に關するを問はず、眼に映じ、手に觸るゝもの、悉く、採て其題目となさざるなく、而して、熱心と、熟練とを以て、取扱はざるものあらず。又、其記載は、甚だ、精密にして、細大到らざる處なく、其倫敦の街衢、鑛山、風景、個人の性格の描寫の如き、皆然らざるものあらず。

彼れの文を草するや、たゞ漫然、筆を下すにわらず。必ず、確然たる目的を以て、之に従へり。乃ち、彼れは、世界、殊に、獨逸の社會的、政治的狀態に満足せざりしを以て、あらゆる形式に於ける、政治的束縛に向て、戦闘し、破壊するを、其終生の目的とせりしなり。而して、彼れは、此戦闘に従事するに、人間の用ひ得る最銳の利器を以てし、尤も勇敢に、尤も大膽に格闘したり。

「ハイチ」の大作を出さざりしは、事實なり。然れども、其詩文中にあらはれる機智及び譏誚は、他の尨然たる大冊にして、人生觀、世界觀を没却せしものに比せば、其優劣果して如何ぞや。

個人として、彼れは、多くの卓絶せる、且、愛すべき性質を有せり。彼れ、佛

に在りて、適意の生活を送りしも、猶、其故國を忘却せざりしは、既に云へり。實に、彼れの、故國を去て、巴里に永住せしは、自由民として、好遇せられ、誘導せられしによれり。然れども、猶、佛國のよりも、獨逸的思想を有し、常に、故國の名譽を失墜せしめざらむと欲せり。彼れの、其間に於ける決闘も、また、此に出でしに外ならざるなり。彼れは、又交友に厚く、熱情に富み、從て、義侠の風あり。故に、困窮者を保護し、屢、他人の怨恨を報せりと云ふ。彼れは、猶、義務を盡すこと嚴密にして、其尤も注意せしは、負債償却の事なりしなり。

彼れの孝心は、深かりき。近時、刑行せられたる彼れの言行録中、其父に對する愛を證明するもの、頗る多し。其母に對するものは、彼れの詩文中に、

著しく散見せり。
嗚呼、此天才ある叙情詩人、雲の如く過ぎぬ。然れども、星の如く、時の天
にのこれり。燦然たる光、陸離たる影、彼れ、蓋し、彼れと共に滅せむか。

明治三十八年二月一日印刷
明治三十八年二月二十日發行

編輯兼 渡邊阿久里
發行者

印刷者 長谷川勝五郎
東京市本郷區新花町五十五番地

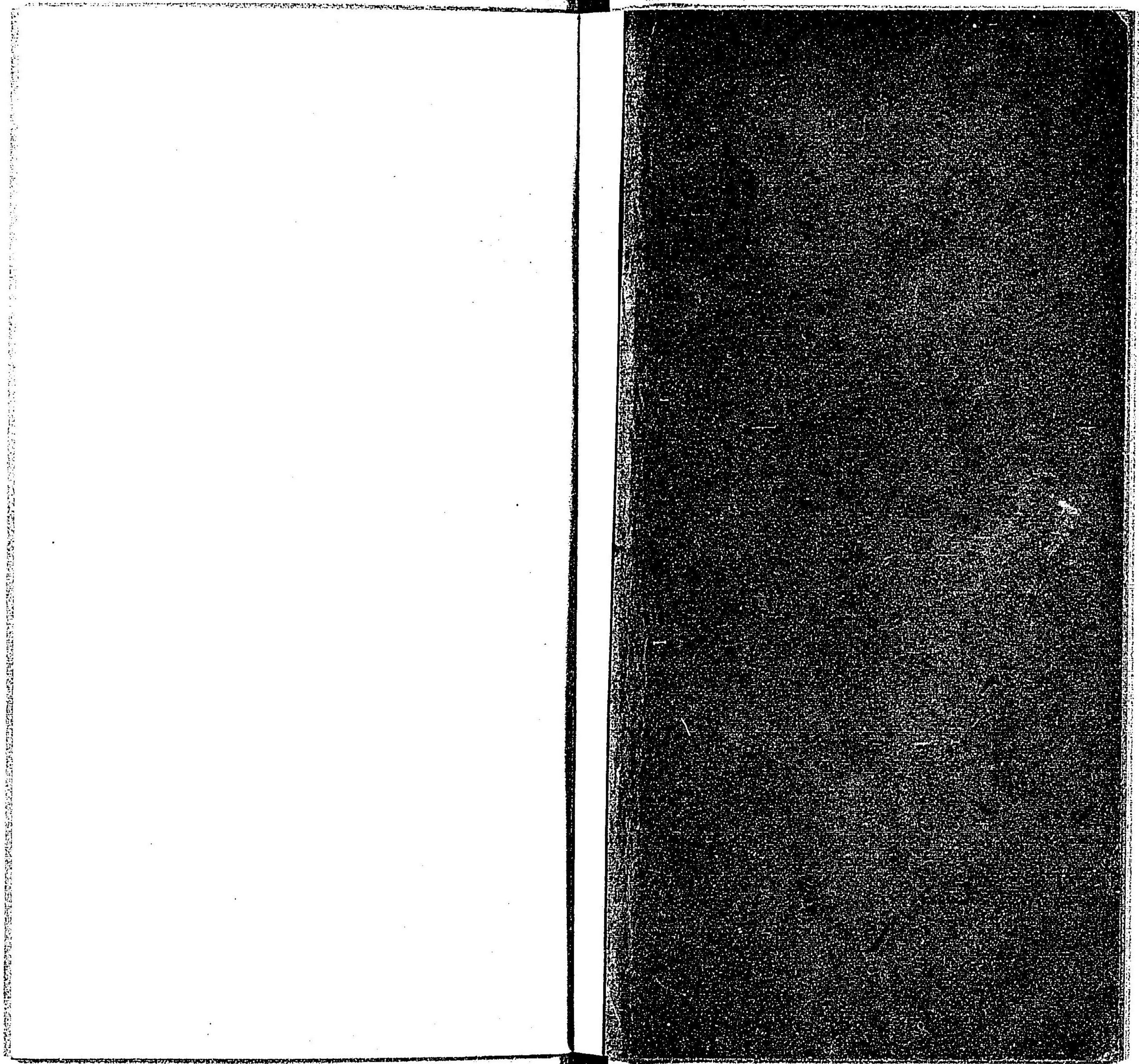
印刷所 一心堂印刷所
東京市本郷區新花町五十五番地

複製 不許

定價 廿五錢

發售所

東京市神田區錦町三丁目 渡邊書店
東京市神田區水神保町 三省堂書店



特22

460

ハイネの詩

国立国会図書館

101285-000-2

特22-460

ハイネノ詩

尾上 柴舟ノ訳

M38

DBY-0615

